

世界と競い合える日本の都市へ

人と暮らしに立脚した都市再生とは



オフィス街が世界のブランドショップの並ぶ街に発展 丸の内

が歴の群れのような形で発展するというのが定説になっていきましたが、もはやそうした発展モデルが通用しなくなってきている。日本は、日本の都市はこのままで世界の都市と競争できるかどうか、危ういと思っていました。

城戸 確かに東京も丸の内なんかは変りはじめていますから希望的観測を持っているんですけど、海外の例えばヨーロッパなどでは繁華街でも街の歴史を感じながら歩ける。しかし東京の繁華街はもう高度成長期以降の風景しか見られません。大正、明治とさかのぼっての風景が全く感じられないことが東京の魅力に欠ける点だと思えますね。最

近いうちや美しい街をつくらう、景観を大事にしようということになってきました。私はそぞろ歩きができる街、疲れたらカフェがあったりベンチがあったり、木陰があったりする街が魅力的だと思っています。若い頃は買物の街、オフィスの街とエリア分けされていて、用がないところには全く行かなかったのですが、最近では衣、食、住が共存できる街とかいわれて、はじめて街が呼吸しはじめたのではないかと思っています。私にとってはちよつと立ち止まってスケッチしたくなる街が、人が住みやすい、気持ちがいい、人間本位の街なのだと思います。浅井 日本の都市は市民の生活と街のあり

生活と街が乖離

森野 日本の都市は世界と競い合えるかというテーマで話を交わしたい。私は先日、韓国のソウルへ行きましたが、道路や河川などの都市基盤が整っていて、超高層住宅がたくさん建っている。明洞(ミョンドン)などの繁華街も大へん活気があり、しかも新宿、歌舞伎町とは対照的に不健全ではないのです。従来、日本が先頭に立ってアジア諸国・地域



浅井 慎平

写真家
早稲田大学政治経済学部中退
1988年『ビートルズ東京』でデビュー。新録・雑誌広告・CFなどで音楽界等受賞。写真以外 映画製作 文芸 音楽プロデュースなどマルチクリエイターとして活躍中。



森野 美徳

都市ジャーナリスト
日本経済研究センター 主任研究員
早稲田大学政治経済学部卒業
日本経済新聞社に入社。
編集委員を経て退職。

特集 談 鼎

ていだん

城戸 真亜子

タレント 評議者
武蔵野美術大学油絵科卒
カネボウのキャンペーンガールに
選ばれ、映画主演のほか、リポーター、
作詞、エッセイも手がける。
画家としても活躍中。



面にも反映されて、物を生産するところやビジネスをするところと、商業をするところ、住まうところなどの土地利用を分けてしま

が都市にはなくてはならない。城戸 今オフィスビルでは上の階に住宅をつけないといけないというように変わってきているんですよ。

つた。もう一つは男女の役割分担の固定化です。女性を専業主婦という役割に決め込んだものですから、郊外のニュータウンは女性と子供、高齢者だけの街になってしまった。女性進出という社会の潮流に合わなくなっている面があるんですね。そこでもう一度、職と住を一体に考えるという都市づくりの新しい流れが出てきています。六本木ヒルズや汐留の複合開発は代表例です。

森野 東京の都心はそうですね。ただひとつのビルの上下に入れこむのはなかなか難しい。むしろ別棟で建てる例が少なくな。例えば隅田川沿いの中央区新川、新宿区河田町など、賃貸住宅とか特別老人ホーム、デイスーパーなどが入って、さまざまな世代が共に暮らすという形が望ましいのではないですか。

地形と住民をいかに



城戸 希望を話しますと、再開発の場合は多くは土地を平らにしてしまいますよね。そうではなくて本来あった地形を生かすことと、周りに住んでいる人がこれがあつたらいい、こうしたらどうかといった提案をも取り入れた計画が実現できればいい街になりそうですね。歴史や風景が残りますから。浅井 汐留や品川の再開発をみていて思

旧ビルの表情を残し商業機能をプラスして再生 丸ビル



星の街が夜も賑わう街へ 丸の内の新しい表情



休日丸の内らしい空間を オープンカフェの表情 (P)OPANEL/774720/4編/編集

僕は下北沢に住んでいます。半年や1年2年で街が変わってしまう。悲惨ですよ。昔からあった八百屋さんや魚屋さんが消えてコンビニになってしまふ。これは日本が選択した経済システムなんですよ。経済よりも人間を優先することが大事でしょう。朝起きて街へ出ると犬を散歩させたり、掃除をしたりする人と出会う。旅での一番の「馳走」は笑顔だとか挨拶だと思ふんですが、日本の街は人の表情がなくなった。黙々と忙しそうに歩いている。人の笑顔のない街をいくつとくても人は幸せにはなれません。城戸 外国でも街の中に中庭のような空間があつて、こどもの声が響いていたり、人間の匂いが漂っていますよね。



森野 確かに1960年代からの高度成長期には農業から工業が主体となり、工業社会となりました。工業社会というのは大量生産・大量消費を前提に分業を極めた社会システムですから、それがそのまま都市計

ていますが、絶望的な姿をしてるんですけど、かつての自分を見るように僕は好意的に見ているのですが、彼らも含めて受け入れるような器の大きさ



飛田町コンフォガーデン



変わったデザインサービス機能



築えられた保育施設